異星人たちの空

大輔華子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異星人たちの空

【Ｎコード】
Ｎ７６０８Ｘ

【作者名】
大輔華子

【あらすじ】
母なる惑星を追われ、何千年も避難所（宇宙ステーション）での生活を強いられていた高度進化生命体。移住のため彼らが意を決して目指した先は太陽系だった。しかし、そこには彼らの想像を超える何かが起こっていた……。
スペーススペクタル？　ファンタジー？　それとも、ラブ・コメ？
でも構成は『種』の存続と滅亡を賭けたシビアなものですから、決して心に油断のないようにね。

【華】

1．未知の生命体

地球から光の速度で約四年と百三十日ほどかかる距離。そこには太陽系に最も近い星があります。ケンタウルス座のアルファ恒星系です。

この恒星系は三つの星がお互いの引力に引かれながら回り合っているいわゆる『連星』です。このうち最も大きな星『A』（主星といいます）は太陽とほぼ同じ大きさの、宇宙で言えば寿命も大きさも中くらいの星です。アルファ星といわれるのは、この『A』とその次に大きい『B』（伴星といいます）を合わせ、まとめてよんでいるものです。『A』と『B』の星たちにとっては『勝手にまとめるなよ！』と言いたいでしょうし、『C』（伴星）に至っては『無視しやがって！』と叫びたくなるでしょう。でも、宇宙で仲良く輪になってフォークダンスを踊っているような三つの星はとても仲のいい星たちです。決して離れることはないのです。

ヒトの世界でもありがちなことですが、この無視された伴星『C』が意外に変わった才能を身に付けていることがあったりするものです。『C』の周りには太陽系にあるような惑星が十数個あって、そのうちの一つに今から三十六億年ほど前、生命が誕生しました。地球に生命が誕生したのが今から約四十億年ほど前のことですから、この惑星では地球よりも四億年ほど前に既に生命が誕生していたわけです。このことはどういうことかというと、この惑星には今の地球の人間の四億年後に進化した生命体が住んでいる、ということです。

『住んでいる』といった表現は正しくないかもしれません。何故なら、その生命体は既に『物体』ではなくて、形の見えない『知性』なのですから……。

仮にその生命体を『生命体その壱』と名付けておきましょう。『生命体その壱』は『物体』ではありませんが、彼らにとって『物体』

はとても懐かしいもので、遠い昔、自分たちがそうであったような物体（生物といいます）に憧れています。そして地球の人間のような美しい物体についつい惹かれてしまうのです。

申し遅れましたが、『生命体その壱』の住む惑星とほぼ同じ軌道で伴星『C』の周りを回っている惑星がもう一つあります。ここでは約三十九～四十億年前に生命が誕生しました。『生命体その壱』に遅れること約四億年弱。ここにいた生命体はまだ『物体』としての生物でした。

ところでこのたびのお話の主人公は『生命体その壱』ではなく、地球に似た、地球よりちょっぴり進化した生命体です。これを仮に『生命体その弐』としましょう。

『生命体その弐』の惑星は今から数千年前に、生命体の大先輩である『生命体その壱』に侵略されました。何せ侵略者の『生命体その壱』は知性の生命体であり、もともと形がありませんからやっつけること自体どうしたらいいのか皆目わかりません。さらに厄介なことに、侵略者の『生命体その壱』は寄生虫のごとく『生命体その弐』の肉体に次々と宿り、侵略された方は味方も敵も区別がつかない状態に陥りました。こうして、必死の抵抗も虚しく『生命体その弐』は住み慣れた惑星を追われ、生き残った僅かな者がかつて自分たちで造った巨大宇宙ステーションに移り住みました。

彼らのすみかである巨大宇宙ステーションは、月の半分ほどの大きさの車のタイヤのような形をしていて、伴星『C』の電磁エネルギーを取り込んでぐるぐると回転し、遠心力で重力を得ています。つまり大きくて広いことに疑いはありませんが、何しろ空がありません。見渡す限りの地上であって地平線がないのです。

『生命体その弐』の生き残りはステーションにいる僅か数万人ほどでしたが、ある日その中で、絵本でしか見られない『空』を求めて宇宙へ旅立つ者がいました。彼らはいったいどこへ行くのでしょうか。そう、彼らは彼らの母なる星から一番近い距離にある太陽系を目指しました。一番近いといっても光の速度で約四年半近くかか

る距離です。第三宇宙速度（地球からその引力や太陽の引力を脱して飛ぶロケットの速度。約マッハ四十九（音速の四十九倍）程度）で考えて見ますと、その速度でも片道八万年弱かかる距離です。八年？　いえいえ、八万年ですよ。宇宙は広いんですもの……。

しかし、『生命体その弐』はだてに地球の人間より数千年も早く誕生した訳ではありません。それなりに地球の人間より進化しているのです。

「第三宇宙速度？　マッハ四十九ですって？　それって超遅すぎない？　だいいちケンタウルス座アルファ星はマッハ七十三くらいの速度で太陽系に近づいてるのよ。黙って待ってればそれよりも早く着くというものよ。馬っ鹿じゃないかしら」

そんなことは決して言っていないでしょう。でも彼らは俗に言う『ワープ』まがいのマッハ十五万（音速の十五万倍）を得ることができるのです。光の速度の半分くらいです。その方法については残念ながら地球の人間に示すことはできません。地球の人間は自分の頭で考えなさい。頭は使わないと退化しますからね。

そういうあんたはいったい誰だよ、ですって？

ふふっ。それは、『　ヒ・ミ・ツ　』

かくして、地球の人間に良く似た、しかし人間よりは遥かに（五千年くらい）進化した『生命体その弐』は空を求めて旅立ち、数年ののち、とうとう太陽系に着いたのでした。

2．太陽系の第三惑星

亜光速宇宙船『みー号』船長のハンナの目は、母なる惑星に良く似た、青々と宝石のごとく輝く太陽系第三惑星に釘付けとなった。その両の目には何故だかわからないが大粒の液体が潤んでいる。それは先祖から語り告げられてきた伝説の代物である『涙』だった。まさにこの惑星の姿が彼女の遺伝子に僅かながら保存されていた記憶を呼び起こしたのであろう。

宇宙船『みー号』は、……。ええっ？　『みー号』って？

疑問。何故、宇宙船の名前がそんな変てこりんなのか。答えは、この宇宙船の船長であるハンナが決めたからである。つまり、彼女の愛するペットの名前が『みー』だったからだ。『みー』だからといって地球で俗にいう『猫』なる動物ではない。ケンタウルス座アルファの『生命体その弐』と太陽系の『人間』がたとえ同じような姿形をしていたとしても、知的生命体が同じ形状の進化を辿る可能性は充分にあり、さほど不思議はないだろう。しかし、進化の過程で残っている生物が同じなどという偶然は一般的には有り得ない。『みー』がどんな生物かわからないと思うので、ここでは少しだけ『みー』なる生物の説明を加えておく。

その生物は、みゃあみゃあ、と鳴き、知的生命体にじゃれつき、時々みーパンチ（猫パンチではない）を繰り出したり、仰向けに床に寝たりする生き物なのだ。地球では容易に想像できないだろうが、結構可愛いのだ。しかし時に目つきが悪くなることもある。

――あそこ（第三惑星）には知的生命体が間違いなくいる。我々を侵略者として牙をむいてきたらどうしよう。

宇宙ステーションには数万人の同胞を残してきた。船内にいる十数人の船員は移民を目指し一族の反対を押し切り故郷の星を捨てて

きたのだ。ここまで来て後戻りはできない。仮に戻ったとしても故郷の星は時間の歪みから、もはや出発した時代に戻ることすら出来ないのだ。

「ハンナ船長。システムが知的生命体の存在を確認しました。これから言語の解析をしてコミュニケーションを図ります」

副船長のボーダが緊張した表情を表しながら伝えてきた。

船長のハンナはうら若き美貌の持ち主である。決して年増女ではない。

「そう。まずは音声コミュニケーションを試してみてね」

ボーダは好物の物体を口に含みながら解析映像に見入った。好物の物体とは黄色いもので、皮のようなものを剥くと中から柔らかい棒状のものが出てくる。甘くてとてもおいしい。しかし皮は決してその辺りに捨ててはいけない。床に置いておくと、おっちょこちょいが踏んで足を滑らせ転倒するからだ。

ボーダは聞きなれない信号音を耳にした。思わず緊張して物体の皮を床に落とす。ハンナはボーダの異常な様子に気付き近寄ってきた。

「何？　何か異常？　何かあっ……」

ずるっ！　バターン！

ハンナはふんぞり返って転倒した。好物の物体の皮を踏んでしまったのだ。

「せっ、船長！　大丈夫ですか？」

「痛ーっ！　大丈夫なワケないでしょ！　仕事中にバナリンはやめなさい！」

3．ランディング

『みー号』は何とかかんとか太陽系第三惑星の軟着陸に成功した。船外の大気の成分は窒素が七十八％、酸素が二十一％でほとんどを占めており、故郷の惑星の原始の組成にとても良く似ている。その他に『生命体その弐』にとって有害な物質はないかどうかチェックする。アルゴンと二酸化炭素が無視できない程度含まれているが、生命に危険という範囲ではない。しかし、二酸化炭素の〇・〇四％は含有量としてはかなり高い。

重力加速度はやや小さめであるが生活できない範囲の値ではない。しかし故郷の惑星や宇宙ステーションと比べ大気温はかなり低いようだ。慣れるまでには相当かかるだろう。しかし、気温は低い方がむしろ安全である。防護服で体温を容易に調整できるからだ。ハンナは機関士長のアリザを伴って順に三重のハッチを開閉しながら惑星の地面に降り立った。

ずるっ！　バターン！

ハンナはまたしてもふんぞり返って転倒した。

「せっ、船長！　大丈夫ですか？」

「痛ーっ！　大丈夫なワケないでしょ！　仕事中にバナリンはやめなさいって言ったでしょ！」

「バナリンの皮ではないです。辺り一面、バナリンの皮並みのすべり具合です。気を付けて下さい」

よく見ると辺り一面真っ白で、地面はバナリンの皮よりもかなり滑りやすい危険な状態である。ハンナもアリザも滑ってしまって立ち上がることすらできない。特にハンナは足を長く見せようと、かかとには手指の長さ以上の細長いヒールを施しているためどうにもならない。

――何これ！　これじゃ歩くことも出来ないじゃないのよ！

ふと気が付くと数人の生命体がこちらを向いてごくフツーに歩いて集まってきている。あんなに足が短いのに一人として足を滑らせている者はいない。見たところ特別な装備もない。二人はこの惑星の生命体の運動能力の高さに舌を巻いた。

口のようなところには尖ったものを付けている。真っ白の胴体に真っ黒な広い腕。鋭い目。ハンナとアリザはその場にひれ伏し、命乞いをした。

「クワッ！　クワッ！」

「どっ、どうか命だけは助けて。お願い。侵略するつもりなんてなかったのよ。私たち！」

念のため付け加えておくが、彼らの会話はもちろん『日本語』ではない。『生命体その弐・語』だ。第三惑星人に通じるはずもない。

「クワッ！　クワッ！」

彼らの惑星にはこのモノクロ生命体にとても良く似た生物がいる。ギントリペンペンなる生物だ。そう考えると、そもそも何語であろうと、この生命体には通じないのかもしれない。

ハンナの洞察力には定評がある。彼女はそこで思い切った判断を下した。

――この生命体は、おそらくこの惑星の知的生命体ではない。その証拠に体型がずんぐりむっくりで全然知性的ではない……。

4．未知との遭遇

ハンナの一行はギントリペンペンに似た生物を無視し、よろよろと歩き出した。歩いても歩いても生命体はギントリペンペンに似たものばかりで知的生命体に出会う気配がない。しかも気温はどんどん低下し辺りは吹雪のようになり一行は次第に視界を失っていった。

――もうダメだ。この惑星では生活どころか生命を維持することすら困難だ。

メンバーは一人減り、二人減り、気が付くともう数人しかいない。ハンナは他の船員と折り重なるようになってその場に伏せた。

◆◇◆

目を覚ますと、ハンナは一人で大きな薄暗い部屋のベッドに横たわっていた。何だか部屋全体が揺れている。ハンナは体に掛けてあった分厚いものをめくり、光の差す方へ二歩三歩と歩いていった。

そこには水の広がる大きな光景が広がっていた。確かに水平線があった。そしてハンナが子供の頃、絵本でよく見た『空』がある。

入口から何者かが入ってきた。足はギントリペンペンより遥かに長く体型も『生命体その弐』によく似ている。ただ、かなり太っていて体格はいい。ハンナの惑星ではこういった状況を『デブチン』という。

ハンナはケンタウルス座アルファ星の伴星Cの惑星で知性生命体（生命体その壱）に侵略された生き残り（生命体その弐）の中では、若くて美しい物質の生命体の女性種であったが（ああ、説明めんどくさ）、同様の若くてかっこいい男性種は好みではなく、『デブチン』が好みだった。

――知的生命体のデブだ！

ハンナの表情に緊張が走った。

「◇※△●！」（私は侵略者ではないの！）

「怖がらなくていい。お腹がすいているだろう。歩けるならば隣の部屋にスープとパンがあるから」　防護服の下は胸と腰の一部に樹脂製のシートを貼り付けているだけだったので、防護服を脱いで横たわっていたハンナは人間でいうところのほとんど丸裸同然だった。

知的生命体のデブチンはしげしげとハンナの体を見つめている。ハンナはその視線に対し生まれて初めて『恥ずかしい』という感情を抱いた。

「※△×○！」（このドスケベ！）

「さあ、こっちにおいで。話はあとで聞こう」

ハンナは胸と下を両手両腕で隠しながらデブチンに付いていった。

デブチンはハンナを椅子に腰掛けさせ、正面に座ってパンをスープにつけた。そして、ハンナの前で食べて見せた。

ハンナは何だか良くわからないが嬉しくなってきて思わず笑顔がこぼれた。何年ぶりだろう。少なくとも大人になってからは笑顔を他人に見せた記憶がない。

デブチンもにっこり笑ってまた食べ始めた。

5．サイバーテロ

最初はお互いに言葉が全く通じなかったが、僅か一ヶ月あまりでハンナはデブチンの言葉が理解できるようになった。二ヶ月経つとハンナは日常の会話の範囲であれば不自由がないほどに喋れるようになった。

「君は自分がどこから来たか内緒だって言ってるけど、もうバレバレだよ。君は日本人だ。顔だってそうだし、だいいち二人だけの会話で二ヶ月で喋れるようになる訳がないよ」

「そう。じゃあ、そういうことにしておく」

「歳、聞いちゃ悪いと思って聞かなかったけど、君は何歳？」

「十進法でいうと、三百三十歳よ」

デブチンはおやっ、という表情をしてから思い切り笑い出した。

「はははは。ごめんやっぱり聞いて悪かった」

「あなたは？」

「俺はねえ。えーと。千三十五歳さ」

「うっそう！　なわけない。三百三十五歳でしょ？　そのくらいに見える」

――そのくらいに見えるって、いったいどんな見え方だ。

読み書きの方もその後の一ヶ月の航海中にハンナは電子辞書や電子百科事典を完全にマスターし、日・英・中・韓・独・仏の六ヶ国語をマスターした。そしていつの日か一人で小説まで書くようになった。しかし、彼女の小説はどれもこれも訳のわからないものばかりで、特に日常生活の場面になると全部が全部『非日常』になってしまっていた。

デブチンは書かれた小説を見てハンナがもしかしてエイリアンではないかと思うこともしばしばあった。

◆◇◆

長い航海を終えて船はようやく日本の港に帰港した。

その頃世間では大きな事件が起こっていた。数人の男性グループがコンピュータウイルスをアメリカの金融システムに注入し、取引はもとよりストックデータやマスターテーブルまでを滅茶苦茶に破壊してしまったのだ。いわゆるサイバーテロである。そのうち容疑者として逮捕された一人は訳のわからない言語を発し叫び狂っているという。

ハンナはテレビの映像に映し出された容疑者の顔写真を見て「あっ」と一瞬我が目を疑った。

容疑者は副船長のボーダに違いない。顔が少し変わっていて別人にも見えないことはないが、その言語と手に持たれたバナリン、もとい、バナナは彼自身であることの証だった。逃げている数人も南極で生き残った仲間の船員かもしれない。

――何故、彼がそんなことを……。

彼らは本当に惑星の侵略者になってしまったのか。

ハンナはその日近くにあったデジタル家電の量販店からパソコンの電子部品を数種盗み出し、その夜中、デブチンの自宅にあったパソコンを改造した。そしてこれを利用して国内の銀行のネットワークシステムに侵入し、他人の口座からデブチンの預金口座へ五百万円を振り込んだ。

翌朝彼女は銀行に行きデブチンのカードを使って五百万円のうち百万円を現金で引き出し通帳とともにそれを仕事から帰ってきたデブチンに見せた。

デブチンは自分の通帳を見て、目を丸くして言った。

「おまえ、いったい何者？　俺に何をしようとしているんだ」

「デブチンお願い。このお金で私、アメリカに行くから私に付いて

きて」
「『デブチン』はもうやめてくれ。俺には牧田という名前がある」
「デブチンマキタ。私の仲間が捕まえられているの。お願い、私と一緒に行って」
「仲間？　おまえはテロリストか。そうであればこれ以上世界を変にするのはやめろ。おまえの目的はいったい何なんだ」
「彼は私に何かのメッセージを送ろうとしてるわ。彼に会って話がしたいの」
「無理だ。ボケッ」
「私、一人では心細いの。お願い。私と一緒にアメリカに行って」

6．第二の故郷

ハンナは政治家のパスポートを偽造し、デブチンマキタとともに二人でアメリカに渡った。
ボーダ副船長は政治犯の収監を主とする拘置所に監禁されていた。ハンナの身分証明によって鉄格子越しの面会が特別に許可された。
ハンナはすっかりやつれてしまった髭面のボーダに声を掛けた。
「ボーダ」
ボーダはその声に驚いて顔を上げた。
「ハンナ。ハンナ船長！」
「いったい。いったいあなた、どうしたっていうの？」
「ハンナ。聞いてくれ。この惑星のニンゲンは既に知性の生命体に寄生されてしまっているんだ」
「何ですって？　本当なの？」
「本当だ。彼らは同じニンゲン同士で殺し合っている」
「嘘！　そんなことあるはずない。デタラメを言わないで」
「本当だ。彼ら自身の手で原始的な核分裂融合の兵器を作っているところを現に見たんだ」
「侵入者から守るためでしょ？」
「そうじゃない！　同じニンゲンを殺すための兵器だ。細菌兵器もニンゲン同士の兵器だ。培養しているところをこの目で見た」
「……」
「嘘じゃない。本当なんだ。知性の生命体が俺たちの時のように次々にニンゲンに寄生していって侵略している」
「あなたのした、金融システムを破壊したことを、どう説明する気？」
「たとえばアメリカという部族の中では一割の数のニンゲンが八割の富と財産を形成している。沢山のニンゲンが働いて作り出した物や文化を、一部のニンゲンが『金』に替えて売り買いをし、莫大な

富を得ている。全く実体のない活動で、どんどんニンゲンと社会を退化させているんだ。これは明らかに種の崩壊を意味するものだ。誰が仕掛けているか、ニンゲンじゃない。ニンゲンに寄生した知性生命体がシステムを作ってる」

「あきれた。そんなこと、そんなことってあり得る訳がない。あなた、目を覚ましなさい。あなた自身が知性生命体に乗っ取られたなんてことないでしょうね」

「船長！　私の頭がおかしいというなら、これ以上話すことはないよ。でも、私の言ったことがすべて真実であることはエンジニアのあなたには容易に調べることができるはずだ」

「わかったわ。今は信じることにするわ。どのくらい前から寄生してるというの？」

「わからない。正確には。でもこのチキュウジンの文献から推測すると最初から寄生されているようだ。だから、多分その前、僅か二千年くらい前のことだと思う」

「二千年前……」

「どうすればいい？」とハンナ。

「どうにもできない」と俯くボーダ。

「この惑星のニンゲンも我々みたいに知性の生命体に滅ぼされてしまうんだ。滅びるまで、あと何百年もかからないかもしれない」

ハンナは意味も裏付けもなく思った。

――冗談じゃないわよ。ゼッタイ負けないわよ。

――この『チキュウ』は私の第二の故郷よ！　あんた、何さま？　私の第二の故郷まで奪うワケ？　ふざけなさんなよ。知性の生命体だとぅ？　何ぼのもんじゃい！　はっはっはっ。

彼女は完全に関西のおばちゃん状態である。

7．お尻の目

ハンナはデブチンマキタの待つニューヨーク市内のシティホテルに戻った。ホテルのドアマン・ベルボーイ・フロントマン・コンシェルジュ・エレベータボーイ。何もかもが知性生命体に寄生されたニンゲンに見えてきてしまう。ハンナはビクビクしながらホテルの一室へ辿りついた。

「ハンナ。首尾はどうだった？」

「デブチンマキタ。私はね、実はエイリアンなのよ。サイバーテロで逮捕された彼も同じ惑星の生命体なの」

「ははは、わかった、わかった。顔を剥いだら中から怖〜い顔が出てきたりしてね」

「ジョークじゃないのよ。本当の話。真面目に聞いて」

ハンナは知性の生命体である『生命体その壱』に自分たちの先祖が寄生された際、表れる症状を聞いたことがある。

「ねえ、親指見せて。指の関節のところに『目』のようなものが見えない？」

デブチンマキタは自分の指を見て言った。

「あるある。目みたいに見えるよ」

「ええっ！？　本当に？　じゃあね。お尻見せて」

「おっ、お尻？」

「お尻の下のほうにも『目』があったらアウトよ。あなたは知性の生命体に寄生されている……」

「おまえ、変な趣味持ってねえか？」

「見せるの、見せないの？　ねえ！　どうなのよ！」

「わかった、わかった。見せればいいんだろ」

デブチンマキタはハンナの勢いに押され、しぶしぶと後ろ向きになりズボンとパンツを下ろした。

「ちょっと四つん這いになってみて」

「恥ずかしいなあ。目なんてねえよ」
顔を寄せてしげしげと見るハンナ。仕舞いにはお尻のほっぺたを開いて覗き込む。
「やめろよ。そんな趣味ないよ」
「黙ってて！　うーん。目のような、目でないような……」
「ゼッタイ目じゃねえよ！　いい加減にしろよ！　おい！　そんなに言うんだったらお前も見せろ！」
「私はないわよ。決まってるじゃないの」
「誰が決めたんだ。ええっ？　俺にだって確認する権利があるぞ」
「何のケンリよ！　変なこと言わないで！」
「ほらほらほら」
「キャー！！」
「目がどこにあるかなあ。ここかなあ。それとも……」
「キャー！！」
第三者が見たら、二人の行動はまったく訳のわからないものであるに違いない。

8. 離脱

「Strange play is already the end!」（ヘンタイごっこはそこまでだ！）

鍵を閉めたはずのドアが勢いよく開けられて、背の高い男が三人、次々と部屋へなだれ込んできた。

「なっ、何だ、何だ？」お尻を出したまま慌てるデブチンマキタ。

「We're G-men. The woman will be arrested immediately by the passport counterfeiting and unjust entry」（連邦捜査官だ。パスポート偽造、不正入国で直ちにその女を逮捕する！）

二人は短銃をハンナの方へ向けている。後ろの一人は部屋の様子を何枚も写真に撮っている。

パシャッ、パシャッ。

「おい！　写真撮るな！　俺も彼女もヘンタイじゃあない！」

そっちいく!?　今はそういう問題ではない。

ハンナは咄嗟にホテルのバルコニーの方へ逃げた。

「Freeze!」（停まれ、手を上げろ）

しかしハンナはそのまま窓ガラスを開け逃亡しようとしている。ここはホテルの十一階だ。どうやって逃げようというのか。

だいいち、ハンナだって今やお尻が半分くらい出てしまっている。いや、だからそういう問題ではないっての。

バン！　バン！

二人の捜査官の短銃が火を噴いた。

「ああっ！　ハンナ！」

ハンナは人形のようにその場に崩れた。二発の弾丸が胸を貫通している。デブチンマキタはハンナの元へ駆け寄った。

「ああっ！　ハンナあ！」

デブチンマキタは捜査官の方へ顔を向けた。険しい、しかし泣きそうな表情だ。
「Ｗｈｙ ｗａｓ ｉｔ ｓｈｏｔ！？ Ｗｈａｔｅｖｅｒ ｉｓ ｄｏｎｅ， ａｒｅ ｙｏｕ ｐｅｒｍｉｔｔｅｄ ｔｏ ｔｈｅ ｐｅｒｓｏｎ ｗｈｏ ｒａｎ ａｗａｙ！？」（おい！ 何故撃った！ 逃げたら何をしてもいいって言うのか！）
たどたどしい英語でまくしたてる。
捜査官はゆっくりと顔を横に振り、言った。
「Ｔｈａｔ'ｓ ａｓ ｉｔ ｉｓ ｒｅｇｒｅｔｔａｂｌｅ， ｂｕｔ ｙｏｕ ｓａｙ」（残念だがそういうことだ）
突然デブチンマキタは立ち上がって捜査官に掴みかかろうとしてきた。脇にいたもう一人の捜査官が咄嗟に短銃を発射した。
弾丸はデブチンマキタの太ももに当たり、彼は転んで床に自ら頬を叩きつけた。立ち上がることが出来ない。それでも彼は肘を使って捜査官の方へにじり寄る。
デブチンマキタを撃った捜査官が再び彼の方へ短銃を向けた。しかも今度は頭だ。すると横にいた捜査官が彼の腕に掌を乗せこれを制止した。
「Ｈｅ'ｓ ａ ｃｉｔｉｚｅｎ． Ｗｅ ｄｏｎ'ｔ ｈａｖｅ ｔｏ ｋｉｌｌ」（民間人だ。生かしておいてやれ）
デブチンマキタの頭の中には、長い航海中ハンナと過ごした洋上の生活ややり取りが次々に浮かんできた。そして、最後にハンナの笑顔が見えて、そして消えた。
「ハンナああーー！」
彼はハンナの方を見た。一面真っ赤な血の海の中で彼女は倒れていた。
次の瞬間、彼はハンナの肉体から光輝く何かが浮き上がっていくのを見た。まるで魂が離脱していくような、そんな光景だった。

9．滅亡の危機

その後三ヶ月が経過した。

世間では全世界中が恐怖に包まれる衝撃的な事態が起こっていた。

アメリカ西海岸の上空におびただしい数の葉巻型の黒い飛行物体が現れたのである。

エイリアンの襲来？　知性の生命体の襲来なのか？

いや恐らく知性の生命体ではないだろう。彼らには生命環境を維持するための宇宙船のようなものは必要がないからだ。

やがて黒い飛行物体は太く輝く光を発生させ、次々に大都市のビルを破壊しだした。その光は、戦闘機でいうところのピンスポット攻撃であったが、かなりの頻度で発射されているので、ほとんど絨毯爆撃に匹敵するような被害を地上にもたらした。

人類の方も最新鋭の戦闘機で迎え撃ったが、ミサイルが飛行物体に届く前にことごとく撃ちのめされた。

メッセージも何もない無言の飛行物体は大陸を横断し激しい攻撃を続け、アメリカ合衆国は壊滅状態となりつつあった。空母は一瞬にして撃沈され、戦車を初めあらゆる攻撃の手段が破壊された。飛行物体は、核ミサイルは破壊しない。光で捕獲して宇宙空間へ放り出すのだ。これを見る限り、彼らは地球を破壊に来たのではないことがわかる。人類とその文明を破壊しに来たのだ。

かつて知性の生命体が人間に寄生し人類を滅ぼそうとしていたかどうかは、確証のないことであるが、侵略にしろ自滅にしろ人類の歴史はあと数百年を待たずしてその幕を閉じることは疑う余地のないことであった。しかし、今のこの状況はもっと深刻である。今すぐにでも人類は滅亡する危機にさらされているのだ。

１０．知性の生命体

――ねえ、あなた。デブチンマキタったらぁ。

――なっ、何い？　誰だお前は。

突然デブチンマキタの頭の中に声が響いた。

――ハンナよ。私。ハンナ。

――何だって？　ハンナ！　お前死んだんじゃ……。おい！　どこから話しかけてる？

――フフ。きょろきょろしたって私いないわよ。私はあなたの心の中よ。

――どっ、どういうことだ。俺は頭が狂ってしまったのか？

――いいえ。大丈夫よ。あなたは。私ね。どうやら知性の生命体とやらに進化しちゃったみたいなの。だから、あなたの心に寄生してるのよ。

デブチンマキタは部屋の隅にあった大き目の鏡の前でパンツを下げてお尻を向けてみた。

そこには間違いなく一つの目があって瞬きをしていた。

――えええっ？　おまえ。おまえが俺に寄生した？　やっぱ俺。頭おかしいや。

――しつこいわね。大丈夫って言ってるでしょ！　それより早くしないとニンゲンが滅亡するわ。

――早くしないとって……。何するんだ。

――もうすぐ母船が日本の上空に来るわ。副船長のボーダが侵略者の異性人に寄生して日本の上空に連れてくるのよ。母船以外は蜃気楼みたいなものよ。実体がないわ。相手にしなくてもいいの。母船がすべてなのよ。

言ってることがデブチンマキタにはさっぱりわからない。しかし、侵略者の飛行物体の総本山というか、ボスみたいな奴がもうすぐ空に現れて、それを何とかするみたいな感じは伝わった。

辺りが急に暗くなったので、デブチンマキタが戸外に出てみると、とてつもない巨大な飛行物体が上空に浮かんでいた。彼はこれを見て恐怖に震えた。

――何びびってるのよ。さあ、行くわよ。

――行くって？　どうするんだ。

――簡単なことよ。スーパーマンみたいにジャンプして、飛行物体に近付いていって指差すだけよ。

――だけって。スーパーマンになるだけってことないだろう……。

――つべこべ言わずに言う通りなさい！

――はっ、はい。

デブチンマキタはその場で飛び上がった。すると本当にスーパーマンのようにすうっと空中に浮遊した。そして意志の向くまま飛行物体に近付いていく。
飛行物体は一瞬輝き、光の束を向けてきた。しかし、その光はデブチンマキタ、もとい、スーパーマンマキタの体を破壊することなくすり抜けていった。そして背後の地上では大爆発が起こり噴煙が巻き上がった。

――今よ！　指を差しなさい！

スーパーマンマキタの指先が閃光を発し、火の玉のようなものが徐々に大きくなって突然光が飛行物体へ向けて発射された。
ほんの一瞬の出来事だった。
ちゅちゅちゅちゅっ、チュドーン！！
大音響とともに飛行物体はばらばらになり更に粉々になって塵の如く消えていった。

――やったあ！　スーパーマンマキタの勝ちい！！

スーパーマンマキタは目の前の光景が信じられない。だいいち自分が空中に浮いていること自体、現実として理解できなかった。

11．エピローグ

世界中の飛行物体が母船の粉砕とともに消えてなくなった。
そして、世界中の人々は歓喜して叫び狂った。
人類の危機は土壇場の大逆転勝利をもって回避された。

◆◇◆

何故かわからないが、デブチンマキタに戻った彼は恍惚の表情を浮べていた。彼の頭の中にはハンナの姿がはっきりと見える。ハンナも恍惚の表情を浮べている。

――何て気持ちがいいんだろう……。

――ああ。あなた……。

どうなっているのかよくわからない。しかし、ともかくこの世のものとは思えないほど気持ちがいいのだ。
気が付くとデブチンマキタの後ろには子供が立っている。
「あれっ？　君、誰？」
その子供は口を尖らせて言った。
「あんたの子供だよ」
「何い？　子供？　俺、結婚してないよ。人違いだよ」
「じゃあ、こいつは？」
ふと見ると子供の後ろに十人くらいの子供が並んでいる。二番目の子供が言った。
「パパ」
「！！」
続いて三番目。

「お父さん」
そして……。
「おとっつぁん」
「ダディ」
「ちゃん」
「おいっ！　待ってくれ。俺は君たちのお父さんじゃないんだ！」
その時、デブチンマキタの頭の中でハンナの声がした。
――その子供たち、みんなあなたと私の子供よ。間違いないわ。長男のちょっぴり生意気なところなんてあなたそっくりよ。
――何だって？　結婚もしてないのに有り得ない。変なこと言うなよ。
――本当よ。結婚してないけど、子供作っちゃったでしょう？
――作ってねえよ。
――あら、あなた気持ちよさそうだったじゃないの。
――ええっ？　さっきのあれえ？　それで子供できちゃうの？
――そう、私、知性の生命体だから……。私、下半身デブで多産系だから沢山出来ちゃった。でも、本当はあなたが悪いのよ。頑張り過ぎたから。
――何だとぅ？　お前だって気持ちいいってのけぞってたじゃないか。
――だからってやり過ぎよう。知性と知性の合体よ。あなたの場合、

知性と欲望の合体じゃないの？

「パパあ。パパッたらあ」

ハンナの背丈を縦に縮めたようなおませな感じの少女が、鼻にかかったような声で父を呼ぶ。

「いっぺんにこんな大勢の子供、いったいどうやって育てていくんだあああーーー！！」

デブチンマキタの大きな声に驚いたのか、鳩が一斉に大空へ飛び立った。その声は鳩の間を縫うように秋空に木霊（こだま）した。

【了】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7608x/

異星人たちの空

2011年10月20日17時09分発行